

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：33935

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780331

研究課題名(和文) 地域における障害者の不利益経験の非制度的位相の共有と解消の技法に関する研究

研究課題名(英文) Arts of Sharing and Resolving Non-Institutional Phase of Disability in Community

研究代表者

丸岡 稔典 (MARUOKA, TOSHINORI)

名古屋産業大学・環境情報ビジネス学部・特任講師

研究者番号：20455380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、障害のある身体への否定的な価値づけや障害者と健常者の差異を考慮しない態度、それらの結果生じる自己抑制や自己否定感といった障害の非制度的位相を解明し、それを解消する技法を明らかにする。

まず、世田谷の障害者運動を分析し、障害者の生活する地域をを住民の自発的な参加と学習により構想する運動の実践が、障害者の生活課題を地域課題とし、障害者と一般地域住民の人間関係を拡大することに貢献したことを明らかにした。

次に、演劇グループの参与観察から、一人一人の異なる障害をめぐる経験や出来事について、別の他者に伝えるために、各メンバーが自分の経験を対応させながら理解を深める相互行為の技法を抽出した。

研究成果の概要(英文)：Non-institutional phase of disability is made by social regards towards disabled people and internalizing social norm and bringing autogenous suppression to disabled people. This study aims to clarify arts of sharing non-institutional phase between disabled people and non-disabled people. The main results show:

- 1) Disability movements in Setagaya made the concept of community not as a region but as a space for communication between individuals with disabilities and local residents, and as a space shaping through participation and learning by individuals with disabilities and residents.
- 2) In a process about making of a theater by "Exchange Committee between Minamata and Setagaya", disabled and non-disabled members deepened the dialogue about experience related disability, with referring their similar experience and event for presenting them. The experience was understood as particular one by a disabled person and the problem sharing by disabled people and non-disabled members.

研究分野：社会学

キーワード：非制度的位相 自立生活 まちづくり 演劇 身体障害者 介助

1. 研究開始当初の背景

従来、障害は身体あるいは精神の機能の異常や身体の一部の欠損であり、その結果生じる、活動の制約や社会的不利益は障害者個人の問題とみなされてきた。しかし近年、障害者の活動の制約や社会的不利益の解消は障害者個人の努力によりなされるべきものではなく、社会的に解決すべき課題とする「障害の社会モデル」の視点が了解されつつある。しかし、これまでの社会モデルに依拠した研究の多くは主に、明示化された規則や物理的障壁などの障害による不利益経験の「制度的位相」に焦点を当て、その解消を社会に促すものであった。

しかし、障害には内面化された規範や他者の眼差し及びにそれらにより生成する自己抑制などによる不利益経験の「非制度的位相」も存在しており、社会モデルが解消を目指す不利益経験には「制度的位相」のみならず、「非制度的位相」を含めるべきであることが指摘されている。ここで指摘される非制度的位相とは、周囲の人の「障害は隠したほうがよい」とするような障害のある身体をスティグマ化し、否定的に価値づける眼差しや「発話（構音）障害者とのコミュニケーションを拒否する」といった障害者と健常者の身体的差異を考慮しない態度などである。これらはそれ自体が障害者の社会参加の障壁となるのみならず、その内面化を通して障害者に自己抑制や自己否定感を生じさせる。

我が国の障害者運動はこれまでも障害者の不利益経験の非制度的位相を取り上げてきた。障害者同士のピア・カウンセリングでは障害者の側の価値意識を変更することでその解消を目指している。しかし、そのみでは社会的多数派の健常者には障害者の不利益経験の非制度的位相は制度的位相よりも意識されにくい。今後、障害者の社会的包摂を進め、障害者の地域や職場、学校などへの参加を促進する上では、それらの具体的な局面でその構成員である障害者と健常者の交流を増やすことも必要である。交流を通じて両者の相互作用のあり方を変え、障害者の不利益経験の非制度的位相を可視化することで共有し、解消を図ることが期待できるからである。したがって、障害の社会モデルをより障害者の経験のリアリティを反映させたものへと進化させ、併せて障害者の地域や職場、学校などへの参加を促進する上で、障害者の不利益経験の非制度的位相を解明し、さらに地域や職

場、学校などの構成員の間で共有し、解消めざす具体的な技法を提出することは重要な課題と言える。

2. 研究の目的

本研究では、障害者とその周囲の人の相互行為の中で生じる「障害者の不利益経験の非制度的位相」を解明すること、および「非制度的位相」を障害者と健常者の間で共有し、解消する取り組みの内実を明らかにし、技法として提出することにある。

3. 研究の方法

(1) 主な対象地

本研究では、東京都世田谷地区を主な対象とした。同地区には古くから養護（特別支援）学校が存在し、養護学校入学のために全国から脳性マヒを中心とする障害児とその家族が移住し、学校卒業後も定住した。そのため、学校周辺を中心に多数の脳性マヒ者が居住し、早くからそのネットワークが形成されていた。また、全国的に早い1970年代以降、同地区の駅改善運動を契機とした障害者運動やまちづくり運動などが展開され、その過程で、障害者と地域住民との相互作用が生み出された地域である。

(2) 障害者団体による障害の非制度的位相の共有化と解消の技法の試みの歴史

1970年代以降の世田谷における障害者運動として自立生活運動とまちづくり運動を取り上げ、その生成と展開の過程について、これら運動に関与した団体、個人により公開を前提として書かれた文献のうち、図書館等で閲覧可能なものを主な資料とした文献分析を行った。

そのほか、運動に関与した障害者並びに、地方から世田谷区へ移住した障害者へのインタビュー調査を実施した。

(3) 演劇グループへの参与観察を通じた障害の非制度的位相の共有化と解消の技法の抽出

世田谷区を中心に活動している演劇グループ「水俣世田谷交流実行委員会」を対象とし、障害者・健常者メンバーの日常的な感情や振る舞いやメンバー間の具体的な相互作用を把握するために参与観察をおこなった。さらに資料・映像分析、メンバーへのインタビューなどを実施した。

また、「水俣世田谷交流実行委員会」の水俣公演に同行し、胎児性水俣病患者と意見交換をし、併せて胎児性水俣病患者を招聘

した研究会も開催した。

4. 研究成果

主な研究成果は下記のとおりである。

(1) 障害者団体による障害の非制度的位相の共有化と解消の技法の試み

1970年代以降の世田谷の障害者運動には重度障害者が施設職員や家族以外の人から介助を受けながら地域生活の実現を目指す「自立生活運動」と、障害者と健常者が協力し合いながら、まちの課題を解決することを目指す「まちづくり運動」が存在した。これらの運動は障害者が一般市民と同様に施設でも親元でもなく地域で生活し、また地域に参加することを求めた。しかし、その地域は障害者を排除することで成り立っている場所でもあった。したがって、地域という同じ場所について別のあり様を構想することが求められた。障害者運動/個々の障害者たちは、地域を単に親元や施設以外の物理的な場所としてとらえたのではなく、住民と障害者が交わり関係が形成される空間としてとらえた。さらに障害者と住民の自発的な参加や学習により、介助を必要とする障害者が他人の介助を得て生活し、参加することが可能となる空間として、現在とは異なる新たな地域像を構想しようと試みた。

他方で重度障害者は様々な場面で介助を必要とするため、障害者と健常者の間に「介助をする される」という非対称的な関係がつけられる。まちづくり運動は、障害者と健常者の双方を共通の目的に向かって活動する仲間とし、活動の中で生じる介助行為を仲間同士の協力関係とする理念を通して、非対称性を対称的なものに置き換えることを試みた。しかし、障害者の自立生活運動が対象とする障害者の生活場面においては、障害者こそが中心となる存在であり、障害者と健常者の共通の目的ではなく、障害者の意思や都合が優先される必要がある。あるいは優先されるべき領域に踏み込む必要がある。そのため、仲間同士の協力関係を全面的に適用することができない。したがって、「ひとつひとつの行事に対する協力関係から、日常的な協力関係へ」という理念は、活動空間では機能しえても、そのまま障害者の生活空間に適用するには限界があった。自立生活運動は、個々の障害者と介助者の二者において、「介助をする される」関係とは異なる「本質的共同性」を有する関係が自発的な参加や学習により形成

されることを期待しつつ、その関係を有償化による社会的労働という形で保障することを目指すものであった。

しかし、両運動が構想した理念として地域は、介助を中心とした多数の障害者の自立生活の生活課題へ対応する資源としては限界があり、その解決のためには制度を媒介とした組織が必要とされることとなった。障害者と地域住民の自発的な参加や学習によりつくられる空間としての地域は、1990年代に誕生した自立生活センターなどの介助派遣組織により、生活の場所としての地域に位置付け直され、介助は地域での自立生活の保障へと変化し、並行して障害者個人への生活の支援もなされるようになった。

(2) 演劇グループへの参与観察を通じた障害の非制度的位相の共有化と解消の技法の抽出

水俣世田谷交流実行委員会の芝居の主題では、障害者の不利益経験の非制度的位相にかかわるものが多く取り上げられている。例えば、「自分でできることは自分でする」とする規範を内面化した障害者にとって、「介助を上手に利用しながら生活すること」、すなわち自分で遂行可能であるが時間がかかる動作を介助者に依頼することは、規範と抵触するため、実行しづらい。結果として介助の依頼を抑制し、自立の障壁となることが取り上げられている。また、これまで右手を隠してきた女性障害者の経験では、「右手を隠していれば普通に見える」という親の発言からうかがえるように、障害の表れた右手は普通とは違うものであり、隠すべきであるとする考え方は親を通して本人に内面化され、自身の右手を含め自分のことを肯定的に感じられない障碍者の様子が取り上げられている。そして、こうした健常者のようにふるまう、健常者に近づく努力は、他者に提示する自己像と自己が認知する障害者である自己像のかい離を生じさせ、自己否定観を生じさせることが示されている。こうした障害の非制度的位相は、制度的位相のように明確な形で障害者を排除するのではなく、障害者個人の主観的な経験として生成し、障害者の自己抑制に帰結するため、健常者の目に触れることが少なく、障害者自身もそれに気づきにくい。障害者個人の主観的な経験として生成する障害の非制度的位相そのものを、他者が理解することは困難である。

水俣世田谷交流実行委員会の活動では障

害者に限定された集団ではなく、共通の関心に取り組む障害者と健常者のコミュニティにおける芝居作りの中で、障害を一人一人の異なる経験や出来事とすることにより、障害の非制度的位相の可視化がなされていた。様々な背景をもつ障害者と健常者によるコミュニティが、障害をスティグマ化される共通の属性とせず、一人一人の異なる経験や出来事と理解する契機は、芝居作りのプロセスにある。

芝居作りでは、健常者と障害者、障害者間でも様々な違いを持つメンバーが「対話」することにより、障害の非制度的位相が主題化されている。水俣世田谷交流実行委員会では芝居作りのプロセスで様々な背景をもつ障害者と健常者が「教師と生徒」、「援助者と被援助者」とは異なる対等な関係で出会い、芝居作りという共通の関心に向けて活動する。様々な背景をもつ人々のコミュニティにおいて、会議や稽古の中で障害者から障害をめぐる経験や出来事が語られる。語りは、他の障害者や健常者からの問いかけによりしばしば中断されることで、本人に内面化されてきた規範や自己抑制が了解されるようになる。また、議論や芝居作りの中で、障害をめぐる経験や出来事は、一人一人の異なる経験や出来事と対比され、障害者間でも異なるものと理解される。芝居作りのプロセスでは、演じる側は自らの経験を参照する形で語られた障害をめぐる経験や出来事を了解しようとする。こうした芝居作りの中で、一人一人の異なる障害をめぐる経験や出来事、ならびに経験に関わる人物の行動や気持ち、それらを支える思考について、各メンバーが自分の経験を対応させながら理解を深める。こうした「対話」は、非制度的な形で現れる障害を、障害者と健常者の間で可視化し、共有するための技法の一つといえる。

さらに、メンバーの意見、上演された演劇やドキュメンタリービデオに対する観客の感想を分析した結果、一般的な講演ではなく芝居という表現手法を用いることにより、自立生活や健常者と障害者の相互作用の詳細の実際の様子の理解が促進されていた。また、芝居作りの過程で、「障害者が周囲の人との人間関係の中で感じる感情や障害者の地域での自立生活の実際の様子」が障害者から語られるが、シーンのもととなるエピソードは時間をかけて議論され、本人あるいは他者がそれを演じる中で、エピソードに対する複数の解釈が生まれ、ユー

モラスな演出もなされていた。それらの結果、観客はエピソードを障害者個人の主観に留まらない、客観的な視点を含むものとして受け止めていた。障害を隠さず、「ありのままに暮らす」生き方は、例えば発話障害のある人の話を聞こうとしない人など、障害をスティグマ化しようとする社会の構成員と障害者の間に緊張を生じさせる。障害者の抑制の結果として発話障害の発話は日常的な場面でしばしば障害は不可視化される。したがってこうした障害の非制度的位相は、一般健常者の目に触れることが少ない。水俣世田谷交流実行委員会の活動は日常的な相互行為の場面とは異なる空間を実験的に構築することで、相互行為場面で発揮されやすい自己抑制を解除し、非制度的位相自体を積極的に議論の対象とすることが可能としていた。

また、水俣世田谷交流実行委員会の水俣での講演や研究会から、他地域でのこうした技法の有用性についての示唆を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

丸岡稔典, 2016, 「世田谷における障害者運動の生成と展開 地域像の構想に焦点を当てて」『福祉社会学研究』13号, 106-131.

丸岡稔典・島本義信, 2016, 「障害福祉サービス利用と介護保険利用に関する実態調査の結果」『SSKA 頸損』2016 夏特別号, 11-16.

〔学会発表〕(計2件)

丸岡稔典, 重度障害者の自立生活における地域の意味づけ 世田谷における障害者運動を対象として, 福祉社会学会第13回大会, 2015年6月14日, 名古屋大学.

丸岡稔典, (重度障害者を中心とした芝居作り集団による「障害」をめぐる対話), 2016年年度韓国社会福祉学会春季大会, 2016年4月30日, BEXCO.

〔図書〕(計1件)

丸岡稔典, 2016, 「身体障害者運動と介助」池田理知子・五十嵐紀子編著『よくわかるヘルスコミュニケーション』ミネルヴァ書房, 140-141.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕(計1件)

丸岡稔典, ちよこつと解説, もやい座談会事業, ヤンキー障害者がやってきた, 2015年12月5日, 水俣市役所 総合もやい直しセンターもやい館.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸岡稔典 (MARUOKA TOSHINORI)

名古屋産業大学

研究者番号: 20455380

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者